

「医療過誤の悲劇」

被害者と家族の叫びを聞け！

医療の現場では、患者は弱者である。医療ミスや過誤を巡りさまざまな悲劇が生じ、多くの患者・家族が苦しみ続けている。訴訟になっても、ほとんどの患者は納得のいく結果が得られない。悲しみを語り出したままでは、医療過誤による悲劇はなぜ起るのか。

写真／伊藤隼也

植物状態ながら動脈瘤破裂で死亡に生きている。身長はこの8年余りで30cmも伸びたという。現実を察知はしていますが、命ある限りは「生きて」を願い続けています。(業校さん)

「能なる骨折で植物状態になってしまったわ。病院側は説明もせず、原因はわからない。不慮の事故として諦めてくれ」と言いはかり。納得がきませんでした。

ある日突然、わが子を植物状態にされてしまった田・美枝さんは、怒りを抑え切れず、

90年7月18日朝、黒田敏輝くん(当時6歳)は保育園のバスから友達と遊んでいた。元気が良過ぎたのか、バスから落ちて左肘を骨折。黒田が金沢市立病院に連れていった。駆けつけた父田に担当医師は「簡単な手術が必要」と告げ、手術を開始。しかし、全身麻酔をかけてすぐに敏輝くんは心臓は停止してしまふ。蘇生処置を繰り返したんは呼吸を回復するが、意識は戻りなかつた。その後治療の余地、回復の見込みはなく敏輝くんは8年以上も植物状態である。

両親は、悪非の言葉すらない病院側の対応に納得がいかない。事故から8ヵ月後、「麻酔のかけ方に問題がある」として損害賠償を求める裁判を起した。麻酔記録の改竄の疑いなど不審な点はいくつもあつたが、一審、二審とも訴えは棄却された。敗訴。

金沢市立病院側は、「病院としては万全の処置をした」と返しているが、

「私たちが何も悪いことをしていないのに、負けと言われぬ。納得できない理由を示さない。諦められません」(業校さん)

今年のも、田・美枝さんは最高裁まで上訴した。



麻酔事故 石川・金沢市 黒田敏輝くん (当時6歳)

腕の骨折手術で、なぜ、植物状態に！

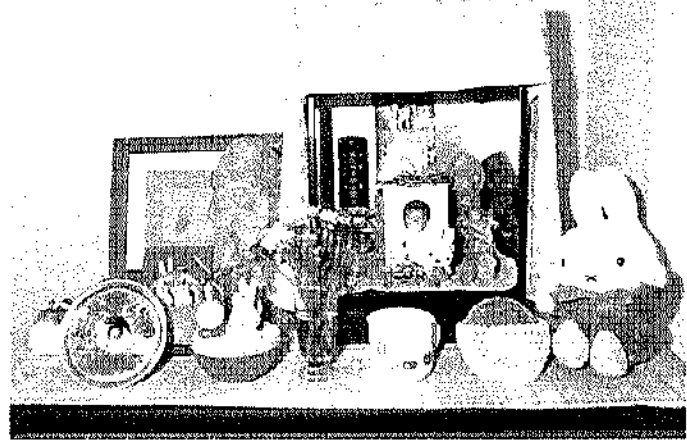
胎盤剝離に気づかず、
胎児は死亡



▲身長42.5cm、体重1748gまで成長していたにもかかわらず、この世に生を受けることができなかったわが娘と、一夜お別れの涙を流した有都子さん。「髪の毛もツメもあるのに、なんで息をしないのか？ ただ涙が流れました」

出産事故

神奈川・横浜市
根本有都子さん（当時24歳）



▲涙を誘う小さな手作りの仏壇。根本夫妻の心の傷はまだまだ消えない

86年4月、初めての子供を妊娠中の有都子さんの当時24歳は、早産の気がある以外、母子ともに順調に過ごしていた。

産院は日毛近くの「林レディースクリニック」が横浜市内で、「こちらは夜中でも常に助産婦がいて、緊急の場合でも大きな病院に繋がっているから安心して下さい」と産院の医師の言葉を信じていた。

しかし、ある日突然お腹に違和感を感じた。4月27日、事故は起きた。

強い腹痛を感じた有都子さんは出血、破水をするに及び、深夜2時半頃、同じクリニックに入院。看護婦は、医師の直接の影響もなしに切迫早産治療の点滴を始めた。

約2時間後、当局と想われる若い医師の方姿を見せ、「早産」と診断した。が、あ

まりの苦痛のため、根本夫妻は大病院への転院を訴えると、この医師は「転院長が決めろ」と拒否されてしまう。

再三の根本夫妻の要請で、医師長は朝7時頃にやっと来院。大病院への転院の手続きを取るが、8時過ぎに転院先に到着した時には、すでに胎児の心臓は停止しており、死んでいた。

有都子さんは、緊急帝王切開が必要だ「胎位胎盤早期剝離」だったのである。

87年10月、根本夫妻は林レディースクリニックを提訴。同病院は、「百パーセント医療過誤はありませぬ」と言いながら有都子さんの涙は流まらぬ。「病院の小さな対応のせいで赤ちゃんは死んでしまった。病院側は慎重にすべきだと痛感しました」

手術ミス

群馬・高崎市
安藤健さん
（当時70歳）

頸椎手術の失敗で、1週間後に死亡



▲医療過誤訴訟は「勝訴的和解」で決着がついたが、裁判を起こしたのはお金が目的ではないので復讐心を持ちません。医師からは事故後一度も謝罪はないですし、今現在も納得はできませんよ」と八重子さん

「九十九パーセント成功する安全な手術で、2カ月後には職場復帰できると医師は言ったのに、夫は術後1週間で死んでしまった……」

悲しめと怒りは、いまだに消えない。安藤健さん（当時70歳）は、91年8月の追突事故の際に負ったおち打ちの後遺症に悩まされていた。手足のしびれ、肩凝りや背中の痛み、頭痛に苦しんだ。

数カ所の病院に通うが、症状は回復せず、92年12月3日、伊勢崎市民病院（群馬・伊勢崎市）の頸椎専門医に「頸椎の外傷性椎間板ヘルニアが顕在化したもので手術が必要」と診断された。



▲健さんは常々「俺は内臓が丈夫だから90歳まで生きるよ」と語っていた

12月16日、健さんは椎間板摘出、頸椎の骨移植及び脊椎の前方固定手術を受けた。しかし、執刀医のミスにより脊椎の周りの血管などを損傷、脊髄に血腫ができたために両手両足が麻痺し始めた。翌日、血腫除去手術を受ける。術後、心不全、肺水腫が疑われる状態になるが、医師は予見できずに、心不全、肺水腫には禁忌とされる過剰な点滴をただ漫然と続け、病状を悪化させた。

12月23日、健さんは他界した。「手術後」悔しい……「とつばやい」と夫の言葉が忘れられませぬ」

医療過誤訴訟では「勝訴的和解」を手にした八重子さん。伊勢崎市民病院側は、「この件は和解というところで決着がついたと思っています」と言っが、愛する夫を失った悲しみが癒える日はまだ来ない。

薬物アレルギーを無視し、
胎児は死亡、母親は植物状態



出産事故

東京・文京区
工藤順子さん(仮名)

▲仕事から順子さんの待つ病室に帰ってきた浩さんが、まずすることは額と額を合わせ「ただいま」と声をかけることだという。病院側は「回復する見込みはない」というが、浩さんは奇跡を信じて、手足のマッサージを一日一時間は続けている。



▲事故から3年近くたついても、浩さんは順子さんのいる病室から会社に通勤を続けている

95年、多胎(3人)妊娠した順子さん(仮名)は持病の喘息の内科主治医がいる東京大学医学部附属病院(東京・文京区)の産婦人科で出産することを決めた。薬物アレルギー体質でもある順子さんは、なじみの病院での出産を願ったのである。

胎児の成長は順調だった。が、陣痛が早くから始まったため妊娠27週余りとかなり早産での出産が決定。その出産を2日後に控えた10月9日夜、事故は起きた。

胎児の肺機能を高めるというステロイド剤「リンデロン」を注射された順子さんは、アナフィラキシーショックを起す。これは、誰にでも、また、どんな薬でも起こる可能性がある最も重い薬物性ショックで、投薬後短時間のうちに顔面浮腫などの症状が現れ、対処が遅れると窒息死に至るといふ恐ろしいもの。

産婦人科の医師らはこの症状をまったく見抜けず、順子さんが否定することもかわらず「喘息の発作」と診断。気道確保などの対処もせず、やがて呼吸は停止した。救急部の蘇生処置により一命は取り留めるが、3人の子供は「死亡し」、順子さんは約20分間の呼吸停止のため脳に障害が残り「植物状態」となった。

「リンデロン」について事前の説明はまったくなかった。投薬については、副作用がないようにと医者に訴えていたのに、私は妻と子供たちをあの医者たちから守つてやれなかった(夫・浩さん)

浩さんは97年8月、国を提訴。取材に対し、東京大学医学部附属病院側は「競争のため、コメントできません」と答えている。

投薬ミス

山口・下関市
富嶋スエ子さん
(写真提供)

単なる風邪が、治療ミスで1カ月後に死亡

「母は身体も丈夫で、大病を患ったこともなく、とても健康でした」

富嶋スエ子さんの母・スエ子さん（当時58歳）は2年前、未熟な医師達の手によって「単なる風邪」にもかかわらず命を奪われてしまった。

76年3月17日、風邪気味だったスエ子さんは、38度を超える発熱のため、自宅前のニシカワ医院に往診を依頼した。

医師は「風邪の一種だが肺炎にはなっていない」と診断し、肺炎予防のためだと注射を打つ。一時熱は下がったが、さまざまな薬の副作用があらわれる。だが、この医師は何の疑いも持たず、場当たり的な投薬治療を続けた。

薬疹という顕著な薬物副作用が出るに至っても「これは風疹」と診断。国立病院への転院を希望する家族の言葉を過り、

医師は、自分の知人であるカマチ外科病院（現・下関第一病院）に入院させた。入院翌日の夜、スエ子さんが風疹の症状を訴へたところ、スエ子さんの症状とはまったく違うことに気がつき、翌朝すべて国立病院に転院させるが、すでに手の施しようがないほど悪化していた。

投与したさまざまな薬剤の副作用で全身の骨髄の造血機能が破壊されていたスエ子さんは、約1カ月後の4月23日朝、亡くなった。

母の死後、スエ子さんは父と共に医療過誤訴訟を起こすが、「一審敗訴。最高裁で二審破棄、高裁差し戻しを勝ち取るまで20年以上の歳月がかかった。ニシカワ医院、下関第一病院とも、「いまでもきちんと治療はやつたと思ってる」と語っている。



▲（写真上）スエ子さんの遺影を手にする父・茂さん（左）とスエ子さん（右）。（写真白）101歳のスエ子さん（右）とスエ子さんの母・スエ子さん（左）。2014年11月の間、スエ子さんとスエ子さんの間に訴訟が提起された。判決は「医療ミス判決が出ようとしていた」。